

宗教者における夢の様態と機能（その2）

名 島 潤 慈

Modes and Functions of Dreams Dreamed by Religion-Oriented Persons (2)

Junji NAJIMA

(Received September 28, 2007)

Ⅲ 7人の宗教者の夢の比較検討

1. 7人の夢の整理

これまでのところで善導・智光・空也・源信・法然・親鸞・一遍という7人の宗教者の夢の様態と機能についてそれぞれ検討してきたが、それらを要約的に述べれば以下ようになる（表1を参照）。なお、夢のなかの登場者が何か言葉を発している場合には、夢告の主として括弧のなかに示した。登場者が特に言葉を発していない場合には、夢の主役としてこれも括弧のなかに示しておいた。

善導の見たD1「色とりどりの宝の山と種々の光明のなかにいろいろな仏や菩薩たちを見る夢」は善導の意図を承認する夢である（夢の主役はいろいろな仏や菩薩たち）。D2「1人の僧が経文の奥深い意味を教示してくれる夢」は教示の夢である（夢告の主は1人の僧）。D3「3台の石臼が回転するなかを白いラクダに乗った人がやって来て善導に忠告してくれる夢」は善導のこれからの生き方についての忠告と激励の夢である（夢告の主は白いラクダに乗った1人の人）。D4「七宝の樹の下の金の蓮華の上に座る阿弥陀仏とそれを取り囲む10人の僧を善導が拝観している夢」（夢の主役は阿弥陀仏と10人の僧）ならびにD5「5色の旗がかかった高く大きい2本の旗竿を人々が眺めている夢」（夢の主役は5色の旗がかかった2本の旗竿）は、善導の作品（『観無量寿経疏』）の認証である。

智光の見たD6「阿弥陀仏が智光に極楽浄土の光景を見せてくれる夢」は智光自身の浄土教学への志向性を智光の心のなかに惹き起こすとともに、観想念仏という念仏修行へ智光を動機づけるものであった（夢告の主は阿弥陀仏）。

空也の見たD7「蓮華の上に坐して極楽界を眺める夢」は往生への認可（夢主からすれば往生への確信）であり、これは空也の利他行の内的動因になるものであった（夢の主役は空也自身）。

源信の見たD8「僧が源信に曇った小さな鏡を横川に持って行って磨きをかけろと勧める夢」は、仏性を磨き光らせるためには横川の善知識を求めよという大変具体的な忠告である（夢告の主は1人の僧）。D9「観世音菩薩と毘沙門の夢」は、自己の作品を認可されることへの欲望（それまでの研鑽の集大成である『往生要集』をきわめて価値あるものとして認められたいという欲望）の反映（夢の主役は観世音菩薩と毘沙門）。D10「最澄が源信に合掌する夢」は、最澄に対する尊敬と親近感（夢告の主は最澄）。D11「死ぬ間際の源信の許に1人の僧がやって来る夢」は、死の床にあった源信の心の揺らぎ、つまり死後本当に極楽往生できるかどうかについての不安の反映であった（夢告の主は1人の僧）。

表1 7人の宗教者の夢の様態と機能

番号	夢のタイトル	夢主と年齢	夢を見た場所	夢告の主	夢の主役	夢の機能
D1	色とりどりの宝の山と種々の光明のなかにいろいろな仏や菩薩を見る夢	善導 40代	長安の東南にある終南山の悟真寺(?)	夢告なし	いろいろな仏や菩薩	善導の意図の承認
D2	1人の僧が経文の奥深い意味を教示してくれる夢	善導 40代	終南山の悟真寺(?)	1人の僧	1人の僧	『観無量寿経』の経文の意味の教示
D3	3台の石臼が回転するなかを白いラクダに乗った人がやって来て善導に忠告してくれる夢	善導 40代	終南山の悟真寺(?)	白いラクダに乗った人	白いラクダに乗った人	善導のこれからの生き方についての忠告と激励
D4	七宝の樹の下の金の蓮華の上に座る阿弥陀仏とそれを取り囲む10人の僧を善導が拝観している夢	善導 40代	終南山の悟真寺(?)	夢告なし	阿弥陀仏と10人の僧	善導の作品(『観無量寿経疏』)の認証
D5	5色の旗がかかった高くて大きい2本の旗竿を人々が眺めている夢	善導 40代	終南山の悟真寺(?)	夢告なし	2本の旗竿	善導の作品(『観無量寿経疏』)の認証
D6	阿弥陀仏が智光に極楽浄土の光景を見せてくれる夢	智光 晩年	奈良の元興寺	阿弥陀仏	阿弥陀仏	浄土教学への志向性を智光の心のなかに惹き起こすとともに、観想念仏という念仏修行へと智光を動機づける夢
D7	蓮華の上に坐して極楽界を眺める夢	空也 40代前半	京都の東市の市堂	夢告なし	空也自身	往生への認可
D8	僧が源信に曇った小さな鏡を横川に持って行って磨きをかけると勧める夢	源信 少年時代	大和国の高尾寺	1人の僧	1人の僧	仏性を磨き光らせるためには横川の善知識を求めよという忠告
D9	観世音菩薩と毘沙門の夢	源信 44歳	比叡山延暦寺の首楞嚴院	夢告なし	観世音菩薩と毘沙門	源信の作品(『往生要集』)を認可されることへの欲望
D10	最澄が源信に合掌する夢	源信 65歳	比叡山延暦寺の首楞嚴院	最澄	最澄	最澄に対する尊敬と親近感
D11	死ぬ間際の源信の許に1人の僧がやって来る夢	源信 76歳	比叡山延暦寺の首楞嚴院	1人の僧	1人の僧	死後本当に極楽往生できるかどうかについての不安の反映
D12	善導と法然が対話する夢	法然 43歳のころ	比叡山(?)	善導と法然(対話形式)	善導と法然	法然の自覚と覚悟の促し
D13	磯長の夢告の夢	親鸞 19歳	河内国磯長の聖徳太子廟	聖徳太子	聖徳太子	本物の仏教指導者をよく信じろという勧告
D14	大乘院の夢告の夢	親鸞 28歳	比叡山の無動寺の大乘院	如意輪観自在大士	如意輪観自在大士	本物の仏教指導者にまもなく出会うだろうという予告
D15	六角堂の夢告の夢	親鸞 29歳	京都の六角堂	救世大菩薩	救世大菩薩	救世大菩薩の告命を受諾するという態度決定
D16	康元2年夢告和讃の夢	親鸞 85歳	京都の西洞院か善法院	法然	法然	危機に対する防衛としての法然に対する心理的依存性の現れ
D17	弘安11年の御夢	一遍 49歳	安芸国か伊予国のどこかの道場	夢告なし	一遍自身	一遍の宗教的境地の再確認

法然の見た D12「善導と法然が対話する夢」は法然の自覚と覚悟を促すものであった（夢告の主は善導）。

親鸞の見た D13「磯長の夢告の夢」は本物の仏教指導者をよく信じろという勧告（夢告の主は聖徳太子）、D14「大乘院の夢告の夢」は本物の仏教指導者にまもなく出会うだろうという予告（夢告の主は如意輪観自在大士）、D15「六角堂の夢告の夢」は救世菩薩の告命を受諾するという態度決定（夢告の主は救世大菩薩）、D16「康元2年夢告和讃の夢」は危機に対する防衛としての法然に対する心理的依存性の現れであった（夢告の主は法然）。

一遍の見た D17「弘安11年の御夢」は六字の名号至上主義の立場に立つ一遍の宗教的境地を改めて再確認させてくれるものであった（夢の主役は一遍自身）。

2. 7人の夢全体の検討

D1から D17までの夢のなかで、夢の主役と夢告の主は、D3の「白いラクダに乗った1人の人」と D5の「5色の旗がかかった2本の旗竿」以外はすべて宗教者や仏菩薩であった。そして、これらの夢のなかの D7と D17は夢主本人（空也と一遍）であった。

D3と D5について言えば、既に述べたように夢主自身の内的枠組みに従えば D3の「白」は「往生を願う清浄な心」、D5の「5」は「五道の衆生を益する五色光」ならびに（数字象徴からすれば）「五種正行」であると推測されるので、D3も D5も共に善導浄土教と関連している夢である。結局このように見てくると、D1から D17までの夢はすべて、仏教関連夢であると言えよう。

夢のなかでも夢主によってわざわざ記録される夢、あるいは夢主によってわざわざ他者に語られる夢は、夢主にとって長く印象に残るような夢（印象夢）である。その場合、夢主が仏道の修行者である場合には覚醒時の夢主の関心は絶えず仏教のことにあるので、したがって印象夢として仏教関連夢が増えてくるのは当然のことであると言えよう。

夢の機能については、夢主の意図（夢主がこれからやろうとしていること）の承認、経文の意味の教示、これからの生き方についての忠告と激励、自己の作品（宗教書）の認証、浄土教への刺激化と動機づけ、往生への認可（夢主からすれば往生への確信）、仏性を磨き光らせるための具体的忠告、自己の作品（宗教書）が認められることへの欲望、往生についての不安の反映、自己の使命の自覚と覚悟、勧告、予告、菩薩の告命を受諾するという態度決定、危機に対する防衛としての心理的依存性の発露、自己の宗教的境地の再確認など、夢主によって、あるいは同一の夢主でも時期によってさまざまに異なっている。生活体験・宗教経験・師僧（その人の師となった導き手）・夢主がそのとき直面していた人生課題といったものはそれぞれの夢主によって異なるので、夢の機能がさまざまに異なっているのも当然のことであると言えよう。

IV 夢と宗教者

ところで、夢の機能が夢主によって異なるとか、あるいは同一の夢主でも時期によって異なるとは言ってもしかし、全体的に見てかなり共通する部分もある。それは、夢内容、夢のなかの登場者（夢告の主）との対話、登場者からの忠告などによって、夢主が夢主自身の宗教心や宗教的境地を深めたり、新しい観点（解釈）を獲得したり、それまでになかった新しい行動を起こしたりすることである。その意味では夢は宗教者にとって、一種のサイコセラピスト（心理療法家）のような役割を果たすものである。逆に言えば、宗教者は自分が見る夢によって宗教者

としての発達課題を乗り越えていくものであると言えよう。

宗教者がどのような夢を見るかについてはいくつもの研究がある。例えば、Kenney (2002) は中国の道宣が編纂した『続高僧伝』において見られる、約100ばかりの仏教僧の夢を「並はずれた人物と出会う夢」「僧の母親が見た夢」「地獄の夢」「浄土の夢」「仏像の夢」という5つのタイプに分類している。これらは夢の内容である。しかしながら、宗教者としての発達課題に関しては、筆者の知る範囲ではこれまで本格的に論じられたことがない。筆者自身も現在のところ明確な提言はできないが、浄土教の枠内に限って言えば、例えば信と不信との葛藤の乗り越え、聖と俗との葛藤の乗り越え、自力と他力との葛藤の乗り越え、死後の極楽往生についての不安の克服といった事柄がそこには含まれてこよう。

V 自力・他力の問題

最後に、自力・他力の問題について少し触れておきたい。一般的に言って自力とは、あくまでも自分の力で自己実現を図ることである。一方、他力とは他の力、つまり阿弥陀仏の本願力にまかせることである。行者の側からすれば、自分のはからいを捨てて自然にまかせることである。ここには完全な自己放棄が必要とされる。しかし、完全な自己放棄ということがはたしてありうるのか。信じるということは主体としての自己が信じるのであれば、これも一種の自力と言えるのではないのか。このように疑問は尽きない。

自力・他力の問題を今、あくまでも浄土教的思考の枠内で強いて類型化すれば、次の4つに分けられよう。Aタイプは純一な自力である。Bタイプは自力的な他力である。Cタイプは他力的な自力である。Dタイプは純一な他力である。

これら4つのタイプを今、阿弥陀仏ならびに自己信頼のあり方とかみ合わせれば、次のようになろう。Aタイプは、自分が阿弥陀仏を絶対的に信じているとそう確信している自分自身を信頼する。Bタイプは、自分が阿弥陀仏を絶対的に信じているとそう確信させられている自分自身を信頼する。Cタイプは、自分が阿弥陀仏から絶対的に信じられているとそう確信している自分自身を信頼する。Dタイプは、自分が阿弥陀仏から絶対的に信じられているとそう確信させられている自分自身を信頼する。

ここでBタイプとDタイプにおいて「そう確信させられている」というのは、阿弥陀仏からそう確信させられているという意味である。自力的なニュアンスがまったく含まれない純一な他力であるDタイプの場合、「阿弥陀仏から信じられていること」の確信さえも阿弥陀仏の本願力に依拠しているということになり、ここには人の側の自我のはからいはまったくない。唯一残るのは、このような仏一人関係に全面的に自己投企しつづけている自分である。それをここでは自己信頼と称している。おそらく、他力を旨とする浄土教的な宗教心の発達様式は、A→B→C→DタイプないしA→C→B→Dタイプとなるのではないかと思われる。

7人の夢主のなかでは、一遍は大変独特である。法然は信心と共に念仏行を重視し、親鸞はもっぱら信心を重視したが、一遍は、往生は名号によるものであって信心とは関係ない、名号を信じようと信じまいと名号を唱えれば他力不思議の力によって往生すると述べたのである。

前述の如く晩年の一遍は、「夢と現実とを夢に見た。自分がさまざまに変化して遊行しているなど思っていたら、それは夢であった。目が覚めてみると、今いるこの道場を少しも動いていない。不動なのが自己の本分であるそう思ったが、しかしそれもまた夢であった」という夢を見て、夢も現実も共に夢であり、生死に迷う夢を覚ますのはただただ南無阿弥陀仏だけであるという感想を述べている。

一遍は南無阿弥陀仏という六字の名号以外はすべて、「自己の本分」をも含めてすべてを夢と観じたわけである。しかし、すべてを夢と観じる自分、逆に言えば、六字の名号のみが真実であるとみなす自分を一遍はどこまでも自己肯定しつづけた。つまり、36歳のときに受けた熊野の神託以後、「南無阿弥陀仏 決定往生六十万人」と印刷した紙製の小さなお札を配りつつ、51歳で死去するまで賦算（念仏札を配ること）と踊り念仏の旅を続けた。最初の4年間は1人で、それ以後は次第に人数が増え、結局は20名前後（大橋, 1975）の時衆（六時念仏衆の意）の僧尼の集団を引き連れての、諸国遍歴の旅であった。このような一遍の行動の背後には、よほど強い自己信頼の存在がうかがえよう。

文献

- 赤松俊秀（1961）親鸞 吉川弘文館
- 安藤俊雄・蘭田香融（校注）（1974）日本思想大系4 最澄 岩波書店
- 藤井由紀子（1995）「救世観音」の成立について（佐伯有清先生古稀記念会編，日本古代の祭祀と仏教，吉川弘文館，397-464）
- 福永光司（責任編集）（1983）最澄 空海 中央公論社
- 古田武彦（1970）親鸞 清水書院
- 古田武彦（1975）親鸞思想——その史料批判 富山房
- 速水 侑（1988）源信 吉川弘文館
- 平林盛得（1976）良源 吉川弘文館
- 星野元豊・石田充之・家永三郎（校注）（1971）日本思想大系11 教行信証 岩波書店
- 生桑完明（原文注釈）（1975）親鸞聖人正統伝 （結城令聞監修，現代語訳 親鸞全集第四集 伝記，講談社，221-356）
- 井上光貞・大曾根章介（校注）（1974）日本思想大系7 往生伝 法華験記 岩波書店
- 石田瑞麿（校注）（1970）日本思想大系6 源信 岩波書店
- 石井義長（2002）空也上人の研究——その行業と思想 法藏館
- 出雲路 修（校注）（1990）三宝絵 平凡社
- 浄土宗聖典刊行委員会（編）（1999）浄土宗聖典第6巻 浄土宗発行
- 貝塚茂樹・藤野岩友・小野 忍（編）（1959）角川漢和中辞典 角川書店
- Kenney, E. (2002) Dreams in *Further Bibliographies of Eminent Monks* (続高僧伝) *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 51(1), 507-504.
- 小泉 弘・山田昭全・小島孝之・木下資一（校注）（1993）宝物集 閑居友 比良山古人霊託 岩波書店
- 小山聡子（2003）親鸞の他力念仏と門弟の信仰 日本歴史, 666, 14-26.
- 三枝樹隆善（1992）善導浄土教の研究 東方出版
- 名畑 崇（1963）親鸞聖人の六角夢想の偈について 真宗研究, 8, 56-66.
- 長澤和俊（訳）（1998）慧立／彦棕 玄奘三蔵 講談社学術文庫
- 名島潤慈（1992）親鸞の夢—「三夢記」（建長2年文書）の検討 第3回九州臨床心理学熊本地区大会発表資料
- 名島潤慈（1993）親鸞の夢—六角堂の夢告の検討 日本心理臨床学会第12回大会発表論文集, 320-321.
- 名島潤慈（1996）親鸞の夢—康元2年夢告和讃の検討 心理臨床学研究, 14(1), 1-9.

- 名島潤慈 (1997) 法然の夢—二祖対面の夢の検討 心理臨床学研究, 15(1), 66-76.
- 名島潤慈 (1999) 善導の夢—三夜の夢における数字の意味についての検討 心理臨床学研究, 17(2), 113-123.
- 名島潤慈 (2002) 一遍の見た弘安11年御夢の検討 山口大学心理臨床研究, 2, 3-13.
- 名島潤慈 (2003a) 空也の見た極楽界に到る夢の検討 山口大学心理臨床研究, 3, 3-13.
- 名島潤慈 (2003b) 臨床場面における夢の利用—能動的夢分析 誠信書房
- 名島潤慈 (2005a) 智光の夢の絵—智光曼荼羅の検討 山口大学教育学部研究論叢, 55, 第3部, 73-89.
- 名島潤慈 (2005b) 源信の夢 山口大学心理臨床研究, 5, 9-19.
- 名島潤慈 (2005c) 法然の「三昧発得記」の臨床心理学的研究 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 19, 77-91.
- 中村 元・早島鏡正・紀野一義 (訳注) (1990) 浄土三部経 (上) 無量寿経 岩波文庫
- 中村 元・早島鏡正・紀野一義 (訳注) (1991) 浄土三部経 (下) 観無量寿経・阿弥陀経 岩波文庫
- 中野正明 (1994) 法然遺文の基礎的研究 法蔵館
- 奈良弘元 (2002) 初期叡山浄土教の研究 春秋社
- 大橋俊雄 (校注) (1971) 日本思想大系10 法然 一遍 岩波書店
- 大橋俊雄 (1975) 一遍—その行動と思想 評論社
- 大橋俊雄 (校注) (2000) 一遍聖絵 岩波文庫
- 関口真大 (校注) (1966) 摩訶止観 上・下 岩波文庫
- 親鸞聖人全集刊行会 (編) (1969a) 観経玄義分・序分義・定善義・散善義 (定本親鸞聖人全集第9巻 加點編 (3), 法蔵館, 3-220)
- 親鸞聖人全集刊行会 (編) (1969b) 親鸞夢記 (定本親鸞聖人全集第4巻 言行篇 (2), 法蔵館, 199-202)
- 親鸞聖人全集刊行会 (編) (1969c) 正像末法和讃 草稿本 (定本親鸞聖人全集第2巻 和讃篇, 法蔵館, 141-154)
- 親鸞聖人全集刊行会 (編) (1969d) 浄土和讃 (定本親鸞聖人全集第2巻 和讃篇, 法蔵館, 2-72)
- 親鸞聖人全集刊行会 (編) (1969e) 正像末法和讃 (定本親鸞聖人全集第2巻 和讃篇, 法蔵館, 155-226)
- 親鸞聖人全集刊行会 (編) (1973a) 恵信尼書簡 (定本親鸞聖人全集第3巻 書簡篇 法蔵館, 181-213)
- 親鸞聖人全集刊行会 (編) (1973b) 末燈鈔 (定本親鸞聖人全集第3巻 書簡篇, 法蔵館, 57-122)
- 親鸞聖人全集刊行会 (編) (1980) 西方指南抄 (定本親鸞聖人全集第5巻 輯録篇, 法蔵館, 1-368)
- 末本文美士 (1982) 元興寺智光の生涯と著述 仏教学, 4, 43-64.
- 常磐井和子 (1978) 康元2年夢告和讃考 高田学報, 67, 1-11.
- 東京大学史料編纂所 (編纂) (1957) 首楞嚴院二十五三昧結縁過去帳 (大日本史料 第二編之十一, 東京大学出版会, 306-311)
- 東京大学史料編纂所 (編纂) (1965) 空也上人絵詞伝 (大日本史料 第一編之十四, 東京大学

出版会, 87-110)

渡辺喜勝（1996）一遍智真の宗教論 岩田書店